

# 〈研究ノート〉 中世ヨーロッパの観相学研究 (二)

## ——二つの「観相学の書」について——

黒田 加奈子

本論は、現在論者が取り組んでいる研究テーマ「中世イタリア観相学思想に基づく視覚表象文化の再検討」の一環のなかで着目する中世イタリアに流布していたテキスト群の一部、ピエトロ・ダーボノの『観相学概要』および『観相学の書』について、現段階で把握できた内容を検討するものである。<sup>1)</sup>

本論で取り扱う「観相学思想」の特質や歴史的背景、およびピエトロの著作の大きな内容構成については、すでに拙論「中世ヨーロッパの観相学研究——北部イタリアの視覚表象解釈のための覚書」において概括している。<sup>2)</sup>

すなわち、中世ヨーロッパの観相学思想は、古代医学において身体と精神の変容によって生み出されるサインを読み解くという技術としてまずその必要性を担保されたのち、さまざまな経緯を経て容認される宇宙観、すなわち身体と天体の照応関係のあり方とむすびついた形で著作として現存することを確認した。

本論は、彼の著作内容を検討するに当たり、論旨の必要上、この拙論と一部重複する箇所が出てくることをお断りしておきたい。また、ラテン語の書き起こしおよび翻訳についてはいまだに検討段階にあり、不十分であること

をご承知おき頂きたい。さらに、挿絵にみられる図像学的検討については別稿で行うこととする。

### 『観相学概要』

ピエトロに帰される観相学に関連する著作として挙げられるものとして、『観相学概要 *Compendio physiognomiae*』（二二九五年成立）がある。巻頭言によれば、マントヴァ・ムーネのカピターノ・ジェーネレであったバルデローネ・ボナコルシ（ボナコッシ）(Bonacolsi (Bonacossi), Bardellone, ? — 一三〇〇：在位一二九二—一二九九) に捧げられている。<sup>3)</sup> 十五世紀のパドヴァに由来する、オックスフォード市ボドリアン図書館蔵のものをはじめ、多くの手稿写本が現存し、かつ一四七四年にパドヴァで印刷事業者ピエール・モーファーによりインクェナブラで製作された版を皮切りに、一五四八年ヴェネツィアで出版され、以後たびたび版を重ねている。<sup>4)</sup>

本書は三部構成をとり、冒頭で観相学の妥当性及び必要性を表明する。内容の検討を行った先行研究であるフェデリチ・ヴェスコヴィーニ氏の論考によれば、精神と身体の照応、天体と人間の照応関係の論理展開は、ピエトロの別の著作『調停者 *Conciliator*』に表明されるものとの共通性を見いだせるといふ<sup>(5)</sup>。さらに本書では、天体の影響が身体に表れるという、占星術的かつ観相学的な分類として、第三部第二章において、黄道十二宮のサインのものと生まれる人々の類型を示している<sup>(6)</sup>。この、黄道十二宮に分類される観相学的特徴を描出する記述方法は、後述するモデナ市エステンセ図書館に所蔵される『観相学の書』と題されるマヌスクリプトにも共通するものである。前掲の先行研究でも同様の結論に至っているが、記述方法の共通性はもとより、内容的にも共通性が見出されることから、本作の影響がエステンセ手稿に及んでいることは明らかである<sup>(7)</sup>。たとえば『観相学概要』では、処女宮の影響下で示される特徴について、姿勢がよく太っていない人間で、馬をもち、家庭を愛する見目麗しい人間であること、また魂は不毛な知性に敏感で、良い魂を持つ賢明な学者や教えきれない教義や尺度にもその特徴が現れるとしている<sup>(8)</sup>。一方エステンセ図書館の『観相学の書』では、処女宮の下に生まれた人間は、常に女性に命令し、家を愛し、知性があり、心配性だが、すべての活動において望むとおりに行うことができる、などとされる<sup>(9)</sup>。

## 『観相学の書』

モデナ市エステンセ図書館に所蔵される『観相学の書』は、作者不詳の人物が占星術的知識を集成し、美麗な挿絵を大量に挿入した形で一四四〇―五〇年頃に成立したマヌスクリプトである<sup>(10)</sup>。『観相学の書 *Liber Physiognomiae*』という名称は、本手稿を集成した者とは別の手によって第一葉表に書き込まれた注記に由来する<sup>(11)</sup>。

フォリオ下部に付された現代のフォリオ（あるいはページ）番号として、I、II、1―35、IIが付されている。まず最初にヴォルヴェツレが収録されている（番号I）【図1】。これは、羽のような大きなつまみが付いた太陽と月の描かれた円盤が中心に配され、緯度と経度に従ってその歯車を動かすことにより、円盤を動かした計測者が見える星の位置を見出すことができるようにされている器具である。他の天文学・占星術写本に収録される計測器具としても類例が存在する<sup>(12)</sup>。また異なるタイプのヴォルヴェツレは最終葉のIIにも収録されており、こちらは太陽の出入りの方角を計算するためのものである<sup>(13)</sup>。

フォリオ一から、「一年間の予言についての言葉」さらに「一年の予言についてのシビラの言葉」が続く。一月朔日がどの曜日から始まるかによって、流れる一年間の様相―四季の寒暖、収穫物の増減、戦争の有無、病気が流行するかどうかなどが異なることが示される。さらにフォリオ二表には「一年の四季」で始まる節があり、ここではうお座、ふたご座、おとめ座、さそり座に、太陽が位置するときに季節が巡ることが示される。

フオリオ三表から八裏は、占星術図像学上でも、多くの機会に議論の俎上にあがる挿絵の掲載された部分となる【図2】。上部に各宮を家とする惑星と各宮の名称が記され、その下に円の中におさめられた各宮の記号図が描かれる。その下から各宮のもとに生まれた人々の性質や具体的な災厄についての記述が記される。その下には、両脇に男性と女性の肖像を従えた惑星の擬人像が描かれている。<sup>14</sup>

フオリオ九表裏には、「ピタゴラス哲学の天の計算」と表が続く。

フオリオ九裏から十五表には、黄道十二宮の星座を構成する星々が、各宮のもとに生まれた人々に与える影響についての記述がある。

フオリオ十五裏には各曜日に生まれた人々の道徳的性質についての記述があり、さらに黄道十二宮星座の成す三角形についての記述が続く。

フオリオ十六表から十七表には、黄道十二宮における、月の位置について論じられている。月がどの位置にあるかによって、気候、人間の生活、病気などの様々な影響を与えることが論じられる。

フオリオ十七表の下部からは、惑星の擬人像の観相学のおよび精神的特徴が語られる。

フオリオ十八裏から二四表には「ホロスコープの書」が収録される。各月生まれの子の肉体的精神的特徴、および生涯に起こる出来事についての予言を行っている。つづいて不幸な日についての記述があり、悪い出来事や不幸を避けるための警告が記述される。

フオリオ二四裏から二七表までは、「預言者ダニエルの夢の書」が続く。この書は八世紀から存在が確認される、預言者ダニエルに帰される夢占いの

教則の類であるという。<sup>15</sup>

フオリオ二七表上部からピエトロ・ダーバノの名が冠せられた健康指南書が収録される。<sup>16</sup> 身体を健康に保ち、たびたびおこる不具合を避けるには、各月に何を食べ何を飲むべきなのかを詳細に指示するとともに、一年のうち、どの時期に瀉血をするべきなのかを指示している。食事法や予防、また瀉血に適した時期について指南する書は、有名な『サレルノ養生訓 *Regimen Sanitatis salernitanum*』（十四世紀初頭）をはじめ数多く存在する。とくに瀉血という医療行為は、時祷書の挿図の一部としても現れる「黄道十二宮身体」として、瀉血する部位とその行為が最も効果を発揮する時期を示す図として<sup>17</sup>も流布していたことから、広く人口に膾炙する行為であったとされる【図3】。

フオリオ二八表には、ペストに対抗するより良い治療法について論じられている。葉草や溶いた卵黄を用いた膏薬や木の根や植物を入れた風呂の活用などが示されている。

フオリオ二八裏から二九表には「日の時間」の表が収録されている。各曜日において、各時間がどの惑星に影響を受けるのかを一覧にしたもので、各曜日に計二十四の七惑星の名が並んでいる。

続いてフオリオ二九裏から三〇裏には、朔望月の各日に活躍する聖書の登場人物たちについての記述がある。また、人々が家の建設や結婚、商業に関する行動を起こすのに良い日などの指示も含まれている。

フオリオ三一表から三四裏には、十二か月の太陰月の表が示される。この表を通して、月が常に動く日付、時刻、分（部分）を知ることが可能となっている。

フオリオ三表から八裏の本文、および挿図は、先述したとおり占星術図像学上において議論を尽くされている部分である。とくに、「惑星の子供たち」という図像主題の基礎となるような内容が本文では展開される。たとえば、白羊宮のもとに生まれた人々の記述は以下のようになっている【図2】。

#### 火星／白羊宮

白羊宮の気候のもとに生まれた男性、すなわち3月後半から4月前半までに生まれた人々は、働き者になり女性の愛に忠実になるだろう。また、金持ちでも貧乏でもない。近いものにいる誰かに侮辱され、遺産を受け取り、怒り易い性質になるだろうが、ただちにたやすく穏やかにもなる。多くの幸運を持つが、多くの争いを耐え忍ぶ。知識欲が旺盛で、たやすく雄弁に長けるようになり、うそつきになるだろう。変わり易い精神を持ち、敵対者に報復するだろう。年老いた時よりも若いころはまずまずだろう。最悪の姦淫者になるが、二十五歳の時に妻を得よう。結婚しても、この年より前では妻を獲得しないだろう。友人の行いを仲介し、損害に耐え、もうけを得るために、ほかの人の活動に介入するだろう。係争を仕掛ける人や争いに多くかかわり、体に傷を受け、動物から傷を受けるだろう。羊によく似るだろう。毎年羊毛を失うが、必ず取り返すだろう。二十三歳で重い疾患にかかるが治癒し、八十五歳まで生きるだろう。

同様のサインのもとに生まれた女性は、怒り易く、嫉妬により呼び起される不利益を被るだろう。凶暴性を保ち、真の伴侶を失うだろうが、より良い

ものを回復するだろう。二十五歳には死の危機に瀕し、五歳の時に病で倒れるだろうが、避けられれば長く生きよう。それでも四十三歳まで生きるだろう。顔か頭に傷を受け、ひどい頭痛もちになるだろうが、八十歳までは普通に生きるだろう。もし暴力で貶められないのであれば、性悪な態度のために不名誉を受けることになるだろう。

土星と火星の日は、女性にも男性にも好ましいものではあるが、木星の日は何らかのことが襲う。<sup>(18)</sup>

フェデリーチ・ヴェスコヴィーニ氏は、『観相学の書』のフオリオ三表から八裏の本文と挿絵の主題について、本文がピエトロに帰される『平面天球図』にも収録された、パラテロンタやイマギヌスへと続く内容であるとし、かつ挿図は、本文の内容を反映させたものであることを論じている。<sup>(19)</sup>とくに、上記に記述のある「顔か頭に傷を受ける」女性の特徴が、挿図における、右側の女性のそれに一致することを示している【図4】。

先に述べたように、『観相学概論』と『観相学の書』の一部の内容は、各宮に影響を受ける人々の内面的・外面的特徴の記述において共通性があることが判明したが、さらに『観相学の書』の内容は、いっそう占星術的要素における観相学的議論を展開させていく箇所が複数みられる。たとえば、フオリオ十七表の下部からはじまる、惑星の擬人像の観相学のおよび精神的特徴を記述する箇所と、フオリオ九裏から十五表に収録された、黄道十二宮の星座を構成し、各宮のもとに生まれた人々に影響を与える星々について記述す

る箇所である。

フォリオ十七裏では、たとえば火星について、厚いからだ大きな頭を持つ、平等的精神のもとに不和と悶着の因子を持つ分裂的な男性であるとしている。黒が混じった赤い顔をし、太陽の熱を受けたような黒褐色とする。さらに顔について髭はまばらなものをもつ赤色で、ほとんど宦官に一致する赤さであるとする。また赤い服を着ているとする。<sup>(20)</sup>

惑星の擬人像の外見的特徴を記述する文字史料は、観相学関連の手稿に限らず、さまざまな種類のものが既に知られている。たとえば先行研究としては古典でもあるセズネックによる『神々は死なず』では、惑星の擬人化およびその姿を伝える文学的伝統について渉獵を行っている。おそらくこの『観相学の書』の記述の源泉となる史料が存在すると推測されるが、現段階では特定に至っていない。本文ではさらに、各惑星の外見的、精神的特徴を述べるとともに、さらにこの惑星のもとに生まれる人々の職業についても記述されている。火星は火と結びつき、鍛冶職人、パン職人になるという。また何らかのパトロンに奉仕する人になる<sup>(21)</sup>としている。この火星に結び付けられる職業は、当時流通していた占星術作品においてもよく論じられている。たとえば、二〜三世紀ごろに活躍した占星術師フィルミクス・マテルヌスによる『マテーシス』第八巻においても同様の職業が既に論じられている。<sup>(22)</sup>

フォリオ九裏から十五表に収録されている内容は、黄道十二宮の星座に含まれる星々、特に星座の頭、心臓、腹、足に位置する星々が個々に人々に影響を与えるという説を基礎とし、観相学的な特徴、男性と女性の特徴的な特質、人生の予言について論じられている。ここで登場する星々の名は、中東

で現在も使用されているもの、中東に由来するもの、あるいはパダーナ平原の方言の香りを残すものが大半を占めている。<sup>(23)</sup>たとえば、羊の頭の部分にある星は、*aurat*と表記される。これは牡羊座アルファ星 $\alpha$ ハマルに対応するようだ。この星のもとに生まれた者は、貴族の一員、あるいは市民の敵となったり、虚弱で、毛深く、心地よいものを愛する。声が大きく、権力をもち、顔に高貴なしるしを持つなどとされる。<sup>(24)</sup>この箇所のように身体的特徴や、顔に表れるしるし、についての言及がその他の場所でも見られる点が、先に論じたフォリオ三表から八裏の本文とは異なる。現段階では、他の史料との比較段階にないため、どのような経緯を持って各星の影響と観相学的議論が結びついているのかを特定するには至っていない。しかし、中東に由来する星々の名称の使用は、ルネサンス期のエステ家宮廷における占星術文化の代表的作例でもある、フェツラーラのスキファノイア宮殿にみられる東方由来のデカンやパラナテロンタの図像を取り上げてみれば、特筆すべき特殊な状況下でこの史料が編纂されたわけではないことは明らかである。

さらに、各星座の星々の個々の影響に続いて、各星座のもとに生まれた人々への影響も論じられている。この部分は、先述の三表から八裏の本文の記述法と共通する部分であり、内容も重複するものがある。たとえば、おとめ座（処女宮）のもとに生まれた男性について、美しい顔を持ち、よき精神を持ち、穏やかに議論を行い、多くの行動で分別深さを発揮する、などとされる。<sup>(25)</sup>内容的には、前述のピエトロの『観相学概要』第三章第二章の処女宮に生まれた人の観相学的分類にも共通する部分があり、著作の影響が強くあることが見て取れる。

## まとめにかえて

本稿では、ピエトロ・ダーバノに関係する二つの観相学の著作の内容について、検討を行った。結果、これまで共通性のある部分として論じられてきたフォリオ三表から八裏の本文のみではなく、別の個所にもその議論の共通性があることが判明した。とくに、全内容の概括に努めたモデナの『観相学の書』では、ピエトロ・ダーバノにとどまらない、当時のエステ家周辺における占星術的知識の集積の様子が垣間見られる作品であることが、本文の内容からも見て取れることが明らかとなった。浮き彫りとなった、本文の文学的源泉を精査していく必要性も踏まえたうえで、内容の検討に着手できていないいくつかの同時代の観相学に関連する著作の精査と比較検討も行っていくことになる。さらに、モデナの『観相学の書』の挿絵にみられる、占星術図像学上の影響関係も含め、再度ピエトロ・ダーバノの影響が色濃いパドヴァ周辺との関係性を検討することが求められる。

## 注

- (1) 本論は学術研究助成基金助成金若手研究 (B) 「中世イタリア観相学思想に基づく視覚表象文化の再検討」による研究成果の中間報告を概括するものとなる。

- (2) 上村清雄 編『空間と表象』(千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第二五九集、二〇一二年、一七―一九頁)。

- (3) 【巻頭】 *INCIPIIT liber compilatonis phisonomie a Petro padubanensi civitate parisiensi. cuius sunt tres particule. Particula prima in intentione operis & quibusdam combus necessaris ad haec artem. Capitulum primum proemiale manifestatum in tentionis huius libri. Decisio prima in expone cause motive operis & in intentione eius universali.*

*Obilitate generis urbanitatum titulus. Viro fulgenti dono Bardeloni de bonacosis mantue honorandissimo capitaneo generali Petrus padubanensis parisius philosophiae minimus alumnorum grata agere cum salute....(以下略)*

【巻末】 *GRATIAS ALTISSIMO DEO Anno domini millesimo quadringentesimo septuagesimo quarto hoc de phisonomia opus Petri padubanensis per me Petrum mauffer normannum Padue impressum est. (ラテン語書き起こしは論者による。[])は書き起こしに疑問が残る箇所、あるいは補足。以下同じ)*

参照した版は、パリ国立図書館が所蔵し、現在 Gallica で公開されている、一四七四年にパドヴァで活躍した印刷業者ペトルム・モーファール (Petrus Mauffer, 一四五二以前―一四九四以後) により出版されたもののマイクロフィルム複製 (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/pt6k530837>, 二〇一三年八月八日取得。劣化が激しく、読み取れない箇所が多い。以下「モーファール版」と記す。)、および巻頭、巻末については同様に

公開されている。モーファアの出版物一覧の中で複製されている図版を参照した。Cfr. M. Emilie Picot, "Catalogue de livres imprimés par Pierre Maufer et les frères Le Signere", in *Bulletin de la Société de l'histoire de Normandie*, ed. Ch. Métérie (Rouen): A. Lestringant (Rouen), Tome XI (Annés 1910-11), 1913, pp.163-203 特記 pp.163-166 (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5497503k>, 二〇一四年一月三十日取得).

バルデローネ・ボナコルシは、マントヴァの領主である父ピナモンテ Pinamonte (二二〇六―二二九三)より、二二九一年に政権を奪取したが、内・外政ともに父の基盤を受け継ぎ善政を敷いたといわれている。

たとえば、二二九一年にはパドヴァ、ヴィチェンツァ、トレント司教領主との同盟を締結し、ボローニャ、ヴェネツィアとも結んでいる。

二二九九年には甥の奇襲により政権を奪われ、フェッラーラに逃避して、同地で死亡した。ピエトロからバルデローネへ本作が捧げられた経緯に行いては管見の限りでは明らかではない。Walter Ingeborg, voce di

“Bonacolsi, Bardellone”, in *Dizionario Biografico degli Italiani* (コトバンク DBI と記す), Vol.11 (1969), 参照したのは Web 公開版 ([http://www.treccani.it/enciclopedia/bardellone-bonacolsi\\_\(Dizionario-Biografico\)](http://www.treccani.it/enciclopedia/bardellone-bonacolsi_(Dizionario-Biografico)))。二〇一四年一月二〇日閲覧) Muratori, Lodovico Antonio, *Annali d'Italia dal principio dell'era volgare sino all'anno 1749*, v. 11, Milano: Società Tipografica de' Classici Italiani, 1819, pp.592, 622, 656 (“Bardelone de' Bonacossi” signore di Mantova).

(4) ペトルス・モーファアについて、Picot, op.cit, 1913; Scapocchi, Piero,

voce di “MAUFER, Pierre (Petrus de Malafertis, Petrus Franzosius)”, in *DBI*, Vol.72 (2008)。参照したのは Web 公開版 (URL は注2を参照。二〇一四年一月三〇日閲覧)

ジョエロ・ダーズンの他の手稿については Thorndike, Lynn, “Manuscripts of the Writings of Peter of Abano”, *Bulletin of the History of Medicine* 15, 1944, pp.202-219.

(5) Federici Vescovini, Graziella, “Su un trattato anonimo di fisiognomia astrologica”, *Uomo e Natura nella letteratura e nell'arte italiana del Tre-Quattrocento. Quaderni dell'Accademia delle Arti del Disegno*, 3 (1991), pp.43-61. フェデリチ・ヴェスコヴィーニ氏が参照した『観相学概要』の草稿はオックスフォード市ボドリマン図書館 MS. Canon. Misc. lat. 46. 『調停者』は一九八五年に写真による複製版が出版されている。

Pietro D'Abano, *Conciliator. Ristampa fototecnica dell'edizione Venetis apud Iuntas 1565*, Riondato, Ezio e Olivieri, Luigi, a cura di, Padova: Editrice Antenore 1985.

(6) Gallica で公開されているモーファア版では pp.77ff. [particular tertia] Capitulum secundum in naturis. Xii signorum zodiaci / Cuius prima decision est de natura arietis...

(7) Federici Vescovini, op.cit, 1991, pp.51ff.

(8) モーファア版 p.79. Virgo reddat homine[m?] pulchrum quasi domiceillante[m?] staturam habentem equalen et erectam non crassum neque crispus. Secundus animam noc[...is?]  
est acute sterilis sapiens astutum

bone animae veridicus scriba e innumero dogmate e mensura.

- (6) エステンセ家のテクストの詳細については次注を参照。Biblioteca estense universitaria MS α. W.8.20 fol.5v. Natus sub Virgine,.....ribus semper imperabiti domiciliosus erit. Ingeniosus. solicitus. in arte quam voluerit ipsam faciet. ....

- (7) *Liber Physiognomiae*, Lat.697=α.W.8.20, 1440-1450, Biblioteca Estense Universitaria, Modena.

データ詳細は [http://manus.iccu.sbn.it/opac\\_SchedaScheda.php?ID=169091](http://manus.iccu.sbn.it/opac_SchedaScheda.php?ID=169091)  
執筆者 Paola Di Pietro。以下はデータの抜粋。寸法：mm 290 x 211 (c. 1). 折り：1/2 (cc. 1-2) 2/6 (cc. 3-8) 3/4/10 (cc. 9-28) 5/8 (cc. 29-35, 本文を欠くことなく最終葉欠損)。写字者：三人の手による。copista A: cc. 1r-29r; copista B: cc. 29v-30v; copista C: cc. 31r-34r. 装丁：一九五九年モデナ Manicardi 工房により修理。それ以前の装丁は細長い木の板に皮と金属の留め金。来歴：先の所有者である Tommaso Obizzi del Cataio の蔵書票が添付される。一八一七年にフェッラーラ侯の図書館より受け継いだ蔵書に含まれていた。

検討に際し論者が使用したのは、①エステンセ図書館によって、サイト上で公開されている写真複製版(<http://bibliotecastense.beniculturali.it/info/img/mss/i-no-beu-alfa.w.8.20.pdf>, 二〇一一年十二月十一日より公開、二〇一二年九月二五日取得)、②Bulino 社により出版されたファックス版。Bini, Daniele; Di Pietro Lombardi, Paola; Ventura, Leandro, a cura di, *Liber physiognomiae. Lat. 697=α W. 8.20 della Biblioteca Estense*

*universitaria di Modena*, Modena: Il Bulino, 2000. ③上記同書に付属の Di Pietro Lombardi による校訂版。Di Pietro Lombardi, Paola, a cura di, “Trascrizione e traduzione dei testi”, in *Liber physiognomiae. Commentario*, Modena: Il Bulino, 2000, pp. 39-115, ④Bini, Daniele, a cura di, *ASTROLOGIA. arte e cultura in età rinascimentale* (Catalogo della Mostra), Modena: Il Bulino, 1996, pp. 215-223.

- (11) Di Pietro Lombardi, Paola, “Liber physiognomiae”, in *Liber physiognomiae. Commentario*, op.cit., pp. 33-37, p. 37

(12) たゞえば、十四世紀後半に活躍した天文学者・占星術師ニコラス・リオン Nicholas of Lynn による「オックスフォード市ボドリアン大学所蔵の草稿のいくつか」MS Ashmole 789, f.363r, MS Ashmole 370, f.25r (後者はボドリアン図書館デジタルライブラリー LUNA で公開されている)や、十六世紀に活躍したペトルス・アピヤヌス (Petrus Apianus ... 1495-1552) の *Cosmographia*, 1564, fol. 53 にもみられる (<https://archive.org/details/cosmographiapiapia00apia>)。

- (13) Di Pietro Lombardi, op.cit., p.36

(14) この挿絵の、とくにバドヴァに現存する占星術図像との影響関係については、拙論『バドヴァ・ムーネのパラッツォ・デッラ・ラジョーネの壁面装飾研究—中世末期イタリア都市国家の公共建築空間の装飾に見る国家像—』千葉大学大学院人文社会科学位請求論文、二〇〇九年三月、六〇頁以降に論じている。

- (15) Di Pietro Lombardi, Paola, “Liber physiognomiae”, op.cit., p.35.



(16) fol.27r. Ordo compositus a magistro Pietro de Abano de regimine sanitatis tenendus in cuiuslibet mensis anni circuitu et de quibus rebus homana corpora uti debant declaratur pro ut scriptum est.

(17) 『サレルノ養生訓』は、錬金術師、占星術師としても知られる医師ヴェイノヴァのアルノー(Arnaldus de Villanova c. 1235-1313)によって、当時イタリアやフランスに流布していた医学を内容とした短い詩句を編纂・出版されたもので、実際にサレルノ学派を起源とする伝承が含まれているかどうかは未詳とされる。一四八〇年にラテン語で出版されて以降、十五・十六世紀には広く普及したといわれている。

Meyer-Steineg ; Karl Sudhoff ecc., *Illustrierte Geschichte der Medizin*, Stuttgart:Gustav Fischer Verlag, 1965 (小川鼎三監訳、酒井シズ他訳『図説医学史』朝倉書店、一九八二年) p.135.

黄道十二宮身体と瀉血について、小池寿子『内臓の発見 西洋美術における身体とイメージ』筑摩選書、二〇一一年、一八七、二〇二頁に挙げられた図像以外の例として、【図3】を挙げる。本作はフランシスコ修道会所属の僧侶であったジョン・ソマー (John Somner ca.1340-1400)に帰されるカレンダリウムの一葉である。テキストは瀉血の方法を説明し、その中央に黄道十二宮人体が配される。オックスフォード市ボアリブーン図書館蔵 MS. Ashmole 391(2), fol.3r. <http://bodley30.bodley.ox.ac.uk:8180/luna/service/detail/ODLodl~1~125~100189>

(18) fol.3rv Mars/ARIES Natus sub ariete, a medio marcii usque adi medium aprilis, erit magne/industrie, pertinax amore mulierum. Nec dives nec multum

pauper. A/ proximis suis ledetur. De rebus mortuorum in postestate habebit.

Cito irat/ scitur cito pacificabitur. Fortunas multas experientur. Discordias multas/ pacietur. Dirina cupidus. Eloquencia convenienter expeditus omnibus/gratis. Sed mendax erit mobilis animo. De adversariis suis vindic/tam videbit habebit. Melius se habebit in iuventute quam in senectute. Maximus fornicator erit. XXV<sup>o</sup> anno uxorem ducat. Si ante duxerit non/ obinebit. Pro amicis suis interveniet. Inde dannum pacietur. In alienum laborem intrabit, propter acquisitionem insidias multas et lites sustinebit. Cicatrices habebit in corpore. De genere quadrupodum dannum/ pacietur. Hic presertim similis erit arietis qui quolibet anno perdit la/ram suam postea ipsam recuperat. In annoXXIII magnam infirmitatem pacietur. Si de illa evaserit, vivetannis LXXXV.

Eodem tempore puella nata erit iracunda, detrimentum invidie pacietur, libenter mentietur. Virum suum amittet. Sed meliori renovabitur/ anno XXV metum mortis habebit. In anno quint infirmabitur, sed si evaserit diu vivet. Sed vita eius erit in dubio usque ad annum XLIII/ signum habent in facie aut in capite. Capitis dolorem gravem habebit. Vivet annis secundum naturam, nisi per vim corrupatur per malum re/gimen. Dues Saturni Martis sunt istis meliores tann viro quam mulieri. Dies Jovis malus in suis negotiis.

(19) 『平面天球図』Pietro d'Abano (ed. Engel, Johann (1463-1512)), *Astrolabium Planum*, Venezia :Giovanni da Spira, 1488 ; Augusbug, 1494 ヲムホーロの關係、パラナテロンタ、イマギネスについては、前掲拙論、ソムド三

大真' 五〇—五二頁袋本の Thorndike, Lynn, *History of magic and*

inde consequetur, ……

*experimental science*, vol.II, p.920 を参照。Federici Vescovini, op.cit., pp.51, 52.

(千葉大学大学院人文社会科学研究所特別研究員)

(20) fol.17v. Mars dat hominem evacuum habere corpus caputque grossum, facit hominem/ sismaticum et cinçaniam et discordiam inter equales seminantem, huius in facie/ color rubes mixtus nigro et martialis ut sicut dicannus brunum/ habet colorem velut illi wui ad solis calorem vadunt, et in facie sepe grana habent/ rubea et raris in barba pilos gerens quasi spado deputadus est et suos/ iuber pannos rubeos apportari.

(21) fol.18r. Mars artes habet ad igne penitentes facitque ferarios formarios etiam/ et dat homines esse in servicio alicuius domini sepe.

(22) Firmicus Maternus, *Mathesis*\*, Libro VIII, ed. Rossi, Mantova 1988

(23) Di Pietro Lombardi, op.cit., p.35. 校訂版の訳注には、現在天文学上用  
にされる名前と中東由来の名前の対比も掲載されている。

(24) fol.10r. Qui nascitur in alhat superioris prose[?] hominis inferentem bonam inveniet quiaquid petierit accipiat, subniger, princeps populi aut patrie erit, inimicus civium suorum, delicatus, pilosus, amat dulcia, crossa vocem de potestate in potestatem ibit in omnia terra quam intrabit, habebit honorem signum habebit in facie

(25) fol.12v. De signo Virginis secundum marem Faciam et personam pulcrum habent bone voluntatis erit blandos sermones loquitur/ et sapiens in multis actibus danum pacietur vel adversabitur loca peregrina ambu/ labit et luctum